

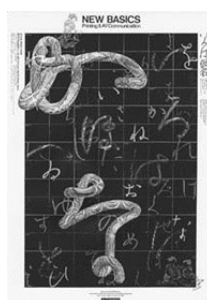
白川静は、天才的な直感と体系化能力を駆使して、古代中国人の世界観と文字（漢字）の字形とのあいだにある相同性を見出した漢字学者です。文字資料としての数万片の甲骨文一つ一つを、トレーシングペーパーに書き写す手作業からこの発見が生まれたことを、次のように語っています。「手で写すことは、コンピューターに打ち込むよりも、はるかに有効です。コンピューターは特定項によって作動しますが、手で覚え、肉体化されたものは、いわば未分の全体を含むのです。手で写して新しく得た資料は、すでにある資料と感じあい、重畳し、互いに意味づけをしてゆく。そういう過程のなかで、私が写しつづけた文字は、皆自らの素性を明らかにしてきたのです。（中略）私が気がついたとき、古代文字はその体系をすべて明らかにしていたのです。」（別冊宝島 167 号『学問の仕事場』114 頁）

さて 19 世紀ドイツ浪漫派の作家ホフマンの『黄金の壺』（岩波文庫）は、主人公の青年アンゼルスが、蛇の化身である運命の女性に導かれ、数々の誘惑と難題を克服して詩人の楽園アトランティスに迎え入れられる物語です。最後の課題は、何冊かの貴重な古文書

を筆写することでした。見慣れた文字の筆写は、やがて異国アラビアの文字を書き写すことを経て、見たこともない文字で綴られた古文書を書き写す作業が始まります。途方にく

れる主人公に、「あなたのおそばにいます」という運命の女性の声が聞こえますが、文字を凝視する主人公の目前に彼女は本当にいるのです。運命の女性の名は

ゼルペンティーナ (Serpentina) で、ラテン語の蛇 (serpens) の派生語です。女性の名を造語するための語尾 -a を持ちますが、同じ機能の語尾 -e を持つゼルペンティーネ (Serpentine) はドイツ語の普通名詞で「(川や道の) 蛇行」の意味です。もちろん「文字の屈曲」の意味もあります。未知なる文字を書き写し続ける主人公は、「やさしく、いとしい女のすがたにすっかりからみつかれたような気がした。それだから、彼女の動きにつれて動くほかはないように思えた。(…) アンゼルス唇に彼女の接吻が触れた。彼は深い夢から目覚めたように感じた。ゼルペンティーナの姿は消え失せていた。(…) するとなんたる奇跡！あの神秘にみちた原稿の筆写がもうみごとにできあがっているのである。」(113-121 頁) 蛇の化身は文字の化身でもあったのです。そしてこの楽園には白川静もきっといるはずで



辻修平「いろは仮名」
(大日本印刷「NEW BASICS」
ポスター、矢島文夫監修
『人間と文字』平凡社 191 頁)

(『紀伊民報』平成二八年七月一日)